大阪信愛女学院短期大学紀要　52：A1（2018）

オブジェ概念が開く幼児教育の可能性について
―「椅子をオブジェにする」実践を通して―

Concerning the Possibility of the Art Object Concept as an Aid to Infant Education
(Putting the Idea into Practice Using a Chair as an Art Object)

原田　昌幸

要　旨

オブジェとは、日本語では「もの」という意味だが、美術の世界ではマルセル・デュシャンによって現代美術の扉を開いた重要な概念を指す。本論では、美術においてのオブジェの意味を考察しながら、筆者が指導した幾つかの学校でのオブジェをテーマにした授業実践を取り上げる。またオブジェは前述のとおり美術においての重要性を持つが、同時に幼児教育での造形意識を開く鍵となり得る要素を持っている。幼児の自由な認識についての理解を広げるために、オブジェがいかに有効かについて考察する。

Keyword:　オブジェ　デュシャン　幼児の造形　　幼児の認識の追体験

1．はじめに

オブジェと聞くと、一般的な日常会話の中では、はっきりと目的を持たないような、それでいて魅力的なものなどが雑貨店などでオブジェとして販売されていたりする。また彫刻などもオブジェとして語られることさえある。

本来のオブジェの意味を考えるならば、日本語で言うと単なる「もの」ということになるが、言葉の理解だけではそれが重要な意味を持つとは決して思えない。しかし本来の意味を踏まえ、美術の中での捉えられ方を理解することで、美術そのもののあり方や美術作品の成立前提の再認識、そしてさらに幼児教育における子どもの世界認識についても新たな視点を持つことが出来うると考える。

本稿は筆者がこれまでに勤務していたいくつかの学校において実施した、オブジェについての授業内容を振り返るとともに、教育現場においてオブジェ概念を取り入れることの意義について考察する。特に実施した学校が、美術専門学校、美術大学校、保育系短期大学と、校種や専門も違うため、学生の課題に対する捉え方も同一ではない。そこには自ずと美術概念の違いや美術全般に関するリテラシーの違いも窺えるだろう。そしてそれらの違いはありながら、それぞれに学生は有効な課題理解に基づいて取り組んでおり、そして自主性を持った姿勢で意義を感じていることから、実施校種の違いが逆に、オブジェによる教育の広い可能性を十分に示すことが出来うるものと考える。

これらの当初の狙いは、主に美術の教育の中での新しい意味を見出すことが主目的であるが、近年筆者自身が幼児保育の養成校において教鞭を取るにあたって、このオブジェの概念が幼児教育においても意義深いものになるのではないだろうかと考えた。それは、ものに対する意味性をいまだ持ち得ていないであろう幼児が、様々なものに初めて接するときの理解に近いものであり、その状態の追体験にもなるのではないだろうかというものである。使用目的を持った製品が、大人にとってはその目的を外れて認識しえないが、使用目的を理解する前にまずものそのものに接する、幼児にとってのものとの出会いを、大人の保育者が理解するための追体験としてオブジェの概念が有効となりえないかを、授業実践を通して考察していきたい。

2．オブジェとは何か

前述のように、オブジェという言葉は広く一般化し、日常的に使われているが、授業でのオブジェ課題を振り返る前に、簡単にオブジェについて確認してみたい。

美術の分野でオブジェについて考えるならば、絶対に欠くことのできない人物がマルセル・デュシャン（1887 年～ 1968 年）である。彼のオブジェを代表するものが、便器による『泉』（1917 年）（写真１）である。

これはアメリカでのアンデパンダン展に出品された、いや正確には出品拒否された作品なのだが、全くの既成品である男性用の便器に『Ｒ．Ｍｕｔｔ』とサインしただけのものである。

通常美術作品は作家が自身の手で生み出したものがその人の作品であるが、デュシャンはオブジェによってこの関係を無意味なものにしてしまった。彼は便器にサインはしたが、便器そのものを自らの手で生み出したわけではない。

便器は元々製品として工場で生み出されたもので

写真１

ある。オブジェとして作品になる＝デュシャンによって選び取られる前に、すでに製品として存在した。これを彼は「レディ・メイド」と呼ぶ。[1)]

使用目的を奪われたとき、その便器は製品としての便器ではなく、目的性を持たない見られる対象でしかなくなる。つまり、本来の便器という意味性を奪い取られたとき、それは単なる「もの」という存在となる。

役には立たない、単なるものとなってしまった便器。使用目的をはく奪された製品は、同時に、ただ単に見つめられる存在になる。その存在のあり方は、実は美術作品と同意義を持つことになる。鑑賞されることこそが目的である美術作品として、オブジェは見つめられることだけを要求する。

これらの考えを受け、便器を椅子に置き換えて、オブジェの課題を数校で実施した。次にその実践例を振り返り考察したい。

３　授業実践事例

3-1　大阪美術専門学校

筆者は平成 4 年より、大阪美術専門学校にて非常勤講師として勤務しているが、絵画専攻・プリントメイキング専攻の 2 回生に対し開講している「現代美術演習」の中で、オブジェをテーマにした課題を実施している。

概略は、まずデュシャンの便器のオブジェについて学んだ後、普段何気なく使用している教室の椅子をオブジェとして提示してみるという課題である。学生は講義の後、幾つかのプランを考え、その中から翌週実際に制作や提示を行う。

条件としては、使用する椅子の個数や実施場所は自由であり、椅子を組み合わせたり、他のものを付け加えたりすることも自由である。

学生は、普段自分たちが制作している絵画や版画とは全く違う考え方の製作態度に対し、大いに戸惑う。戸惑うが、それぞれに自分なりの発想で様々なプランを考え始める。

毎年様々な作品が生み出されるが、考え方や方法により学生作品を幾つかに分類してみたい。

3-1-1　場所を変える（ディペイズメント）

デュシャンは便器を、便所という日常の場所から美術館という非日常の場所に置き換えることによって便器の製品としての意味性を奪い、オブジェとして成立させようとした。この場所を変える行為をディペイズメントと呼ばれているが、授業においてもこの考え方で椅子をオブジェ化するパターンが見られる。

通常教室において椅子は机とセットとなり、整然と並んでいることで人が座るという機能を満たす製品として認識される。これが日常の中で椅子が存在するはずのない場所や状態で設置されていた場合、椅子そのものには何ら手が加えられていなくても、人は「なんだろう？」と疑惑と困惑の目で椅子を見つめる。その時、椅子は日常から解き放たれ、見つめ、考えるしかない対象＝オブジェとなる。

具体的には、トイレに置かれたり（写真２）、廊下の手すりに掛けられていたり、階段に並べられていたり、日常の状態では決してそこに椅子が無い場所に椅子があることにより、非日常の状態＝美術的な鑑賞の世界に変化させられる。

これらは椅子そのものには何ら手を加えられることはないが、意外な場所に置かれることにより、椅子そのものが作品であるとともに、置かれた場所が非日常となる。日常のトイレや階段が、椅子が置かれるだけで違和感のある空間となる。

写真２

3-1-2　別のものを付け加えて座れなくする

椅子の座るという機能を奪う、という点から考えると、椅子の上に何かを置いたり付け加えたりすることで座れなくするという考え方がある。

実際には、座面の上に押ピンを置くなど、発想は単純だが、ひとつではなく多くを隙間なく、しかも規則正しく並べることで、単なるいたずらから作品として十分成立するものになる。

3-1-3　組み合わせるなどして造形的な作品にする（写真３）

複数の椅子を積み上げたり、何らかの形態になるように並べたりすることで、座れない状態にするパターンも多い。ただこれらの作品がオブジェとして考えるべきかというと、オブジェとは別の位相にあると考える。それは、椅子を素材とした造形作品であり、構成的要素が強いものである。

本来オブジェの持つ意味を考えた場合、作者が作り上げたもの＝作品というそれまでの美術概念を覆したところに一番の重要性がある。したがって、椅子を使って作り上げた作品となってしまっては、逆に一般的な造形思考に引き戻されているとも言えるであろう。

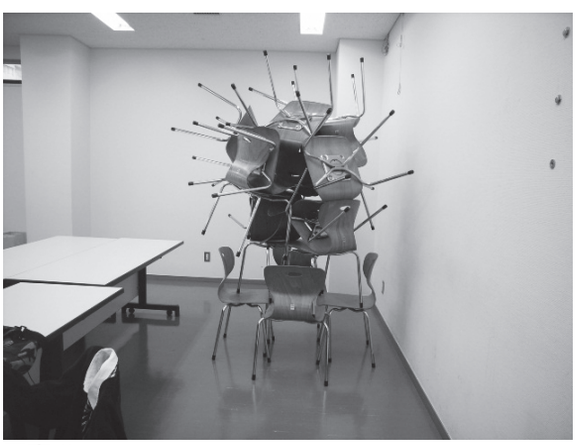

写真３

3-1-4　椅子以外のイメージを生成する

座るための椅子に目を付けることで人に見せかけたり、イスの脚に靴や靴下を履かせてみたり、動物に仕立てたりするタイプのものもよく見かける。（写真４）

椅子を別のものに仕立てるということは、椅子以外のイメージを与えるということになる。メタ･イメージ化するということは、シュルレアリスムの方法をおびてくる。

無意識のイメージ化がシュルレアリスムの重要な点になるが、椅子という日常から椅子以外の非日常なイメージを生成させることは、シュルレアリスムとしての立体作品を生み出していると言えよう。

3-1-5　椅子そのものは何一つ変化させず、コンセプトのみで見方を変える

椅子そのものには手を加えず、場所を変えるということもなく、見るものに考え方を指示することによって、椅子の意味性を変化させる。「これは椅子ではない」との一文が書かれた紙を置いたり、図にある「私には椅（よりかかる）子（こども）という漢字がつけられている」という一文が貼り付けられたりするものがある。（写真５）

写真４

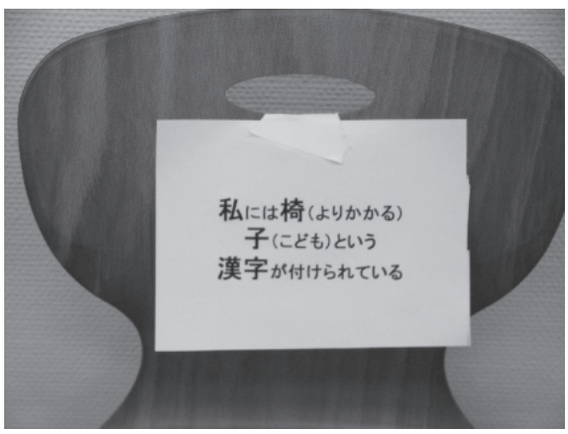

写真５

製品という日常性が、使用目的を奪うことによって、その１点によって椅子でなくなるという点では、椅子そのものに変化がないのに、見方や考え方の変化だけで椅子でなくなるわけであり、これもオブジェの問題の本質にもっとも言及しているタイプであろう。

椅子という存在は変化させず、見方によって意味を変化させる方法は、コンセプチャル・アートを想起させる。例えば、ジョセフ・コスースが端的な例となろう。

コスースの有名な作品に、それこそ椅子をテーマ

にしたものがある。それは椅子の実物と、それを撮影した写真、そして椅子の意味を解説した辞書のページのコピーの 3 点が同時に展示されているものである。（写真６）

写真６

椅子の実態とは何か、椅子の概念とは何か、その差とは何なのか、様々に思考することを強要する作品でもある。ちなみに、この作品を収蔵する美術館は、コスースが制作したり、選んだりした椅子を所有するわけではない。彼のコンセプトに従い、適切な椅子を美術館が用意し、撮影し、辞書のページを展示する。つまり美術館は物体を一切所有せず、彼のコンセプトのみを所有している。作品は椅子そのものではなく、コンセプトそのものである。この点で、コスースはデュシャンの正当な継承者と言えるのかもしれない。

3-2　京都造形芸術大学

筆者は平成 19 年から平成 26 年まで、京都造形芸術大学において、教職課程での彫刻の授業を担当した。これは絵画、彫刻、デザイン、工芸の内、学生自身の専攻以外のものを学ぶという選択科目である。その中で、前述の専門学校での内容と同様の課題を行った。

基本的には専門学校と同様の作品が提示されたが、美術大学の学生であること、キャンパスが少し広くなったことなどから、よりバラエティに富んだ表現が見られた。展示場所に関しても、屋外やひとつの教室を個人で使い切ったり、かなりダイナミックなものも見受けられた。作品という意識が、自身のコンセプトに従い、しっかりとやりきるという意思の強さも感じられた。また日常と非日常の関係について自分なりに考察したうえで、作品として成立させようとする意識も見られた。

3-3　常磐会短期大学

以上の２校は美術系の専門校での実施であるが、ほぼ同じ内容を保育系の短大でも実施した。

美術系ではないので、多くの学生が美術そのものに関心があるわけではない。むしろ、美術に対する苦手意識を持つ者の方が多いかもしれない。その中で、１年間だけではあるが、「美術の世界」という授業を担当した。

この授業の主たる目的は、保育現場をあまり意識しすぎず、美術の持つ広がりを知ることを主眼とした内容である。したがって、子どもの絵や工作はあまり対象とせず、むしろ現代美術の様々な動向を元に、美術に対する思考の柔軟性を少しでも持ちうるように配慮した。その授業の中の一課題として、このオブジェについてもこれまでと同様に行った。

ただ、ここまでの２校では、美術そのものを問題とした課題設定であり、学生が持っていた一般的な絵画や彫刻などへの理解を覆し、幅広い視点を持たせることが主眼であった。

その点今回は、第一に同様の目的を持ちながらも、もうひとつの大きな視点として、子どもの発想を理解する一助としての意味合いも意識して実施した。保育系短大としての特性として、大人の常識に囚われない子どもの発想の自由さというものが、このオブジェの考え方にも通底するものがあると考えたからである。

実際の活動はこれまでの２校と変わるところはないが、出来上がった作品の傾向としては、人や生き物など椅子以外のものに見立てるタイプが多く見られた。（写真７）

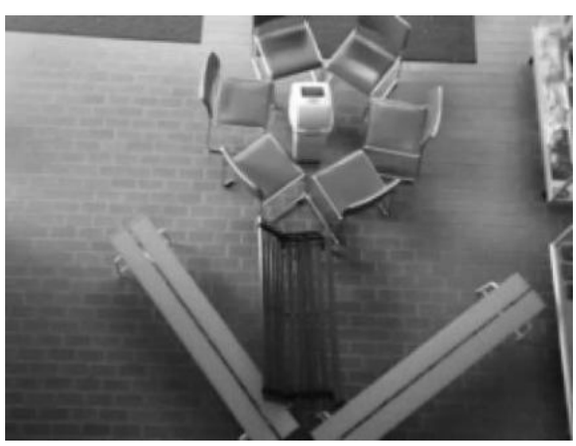

写真７

ただその中でも、ロッカーの上に並べたり、階段に並べられたりしたものは、何かに見せようとしたものではない。（写真８）日常の見慣れた場所に、普段ありえない状況に椅子を設置したものである。椅子そのものに何らの変化は加えられていないが、場所を変えることで椅子の意味性を覆される。

写真８

同時に、普段見慣れたロッカーや、それが置かれた空間全体が、見慣れない状況＝非日常の空間となる。このこともこの課題の大きなポイントである。

常識という意味性に固められた日常世界を、初めて出会う体験に変容すること。それは、子どもが日々体験しているであろう様々な事物との初体験での戸惑いや驚き、そして喜びや興味を、同じとは言えないにせよ追体験することに繋がるのではないだろうか。

3-4　大阪信愛女学院短期大学－保育研修会

筆者が現在赴任している大阪信愛女学院短期大学においても、２度同じ課題を実施した。１度目は、子ども教育学科の学生に対してではなく、幼稚園・保育園での現役教諭・保育士である。これは毎年夏に行っている現場指導者対象の保育研修会において、平成 26 年度に実施したものである。

実施内容はこれまでと同様であるが、出来上がったものは学生作品よりも、本質的なオブジェではなく、自分たちが日常的に知っている何かに見立てたものに終始していた。巨大なケーキであったり、ドールハウスのような家に仕立てたりムカデになったりというものがほとんどであった。（写真 9，10，11）しかも椅子が完全に布で覆われていたりして、椅子の存在はもはや形態を保持する支えとして使用されていることが多かった。

これらは椅子が椅子の役割を奪われてはいる。その点では椅子の意味性をはく奪してはいるが、オブジェの持つ根本的な意味とはずれている。

例えば何かの展示台にするために、椅子に布をかけて仕立て上げたりすることは、日常でもよくあることである。椅子を別の目的のために利用しているだけであり、意味性を宙づりしているわけではない。椅子の別利用ということである。

写真９

写真 10

写真 11

また作られたものがケーキや家など椅子以外のイメージになっているという点では、シュルレアリスム的展開の作品とも解釈出来そうだが、決してそうではないだろう。椅子が別のイメージに変容したと

いうよりも、前記の通り椅子と関わりなく何らかのイメージが実現しているわけであり、イメージの変容とは言えない。むしろ単に本人たちの知り得るかわいいものを立体として造形したものである。

これはまた別の機会にテーマにしたいと考えているのだが、“かわいい”という概念に安易に頼りすぎていないだろうかという疑問がある。保育者の言動を見ていると、様々な事物や事象の評価基準を、可愛いか可愛くないかで判断しているように思えてならない。

子どもの作品でも、安易に可愛いという言葉で表現しがちだが、子ども自身ははたして可愛いものを求めているのだろうか。そうではないことも多いように思えてならない。

話がずれてしまったが、これらの結果を美術専門の学生と比較するならば、オブジェの本質に迫るような内容が見られなかったことは当然だろう。だが常磐会短期大学の保育系専攻の学生の中にも、単純に椅子以外のイメージには依拠しない、本質的なオブジェは見られた。それから考えると、現役教師の方に、より日常生活の中で何か自分が知っているもの、特にケーキや動物など誰もがかわいいと認識しやすいものに必ずと言っていいほど仕立てあげてしまう傾向が顕著であるのはなぜだろう。例えば、かわいいものでなければならないという呪縛にとらわれてはいないだろうか。学生よりも自己の既知である常識にとらわれやすい状態になってしまっているのではないだろうか。これらのことを確認するためにも、再度保育系の学生にオブジェの課題を試みることにした。

3-5　大阪信愛女学院短期大学―授業での実施

そこで大阪信愛女学院短期大学にて、平成 29 年度の 1 回生開講「図画工作科指導法」の授業内において実施した。90 分授業の中で、先にオブジェについて講義を行い、それを受けて数名のグループに分かれ椅子をオブジェにするというものである。「図画工作科指導法」での、それまでの授業内容とは全く違う性質のものであり、戸惑いがあるのではと予想していたものの、むしろ驚くほどすぐに意図を理解し、それぞれ思い思いの場所で椅子をオブジェとするべく活動を開始していた。次に実際の活動内容を簡単に振り返ってみたい。

3-5-1 場所を変える（ディペイズメント）

今回実施された中で、一番多かったのが場所を変えるディペイズメントのタイプであった。

（写真 12）は教室の天井近くにある排気ダクトに椅子を乗せたというものである。この場所は彼女たちが普段から着席し学習している席の真上であり、きわめて日常の場所であるが、とりたてて気にして見上げることもないところである。それがひとたび椅子を乗せられることにより、椅子そのものの機能を奪うとともに、そこが非日常の場所となる。

写真 12

（写真 13）は、階段の手すりに椅子を引っ掛けて並べたものである。ここも普通に行き来している空間であるが、椅子がこのような設置をされることは通常ありえない。
椅子を正面下方から覗き込むことで、伏見稲荷神社の鳥居みたいという意見もあった。

写真 13

（写真 14）は、エレベーターにひとつ椅子だけを置いたものである。通常でもエレベーターが開くと、置き忘れられたものが突然目の前に現れ驚くことが

あるが、その状況を意識的に作り出したということになる。

写真 14

（写真 15）は、教室後方の棚に椅子を横向きに突っ込んだものだが、6 つの座面が密集することで独特の充実感がある。

これらのタイプが多かったのは、最初に行ったオブジェの解説の際に、単なる便器が場所を変えるだけでオブジェという作品＝非日常の存在になるという説明をしたのだが、学生がその内容をしっかりと受け止め理解したということであろう。そしてその発想が、本人たちにも新鮮に、興味深く感じ取られたということに他ならない。

写真 15

3-5-2 組み合わせて別のものにする

もうひとつのパターンが、椅子を組み合わせて作品化するものである。

（写真 16）は、階段下の薄暗い場所もさることながら、複数の椅子が一見乱雑に組み合わされることにより、異様な雰囲気を醸し出している。椅子が乱雑に積み上げられている光景は、打ち捨てられたような状態で日常にもありうるだろうが、この場合は明らかに何らかの意図をもって積み上げられているであろうことは、課題意図が知らされていない人が見ても、十分に伝わるであろう。

写真 16

写真 17

（写真 17）も椅子を積み上げ組み合わせたものである。脚の部分が上下逆さに接することにより鳥かごのように見え、それを強調するために色画用紙で作った鳥が入れられている。これは明らかに椅子が鳥かごに変容したオブジェということになる。

前記の現場保育士の場合は、このイメージ化がほとんどであったのに対し、今回の学生では逆に少数であった。これが何に起因するのかは即断を避けたいが、興味深い違いである。

さて今回の課題は、オブジェの追体験であるとともに、身の回りにある様々な製品が、基本的には大人にとってはその使用目的を理解して接しているが、幼児の場合を想定すると、目的や約束事を知らずに様々なものに接するということに思いを及ばせ、想像し体験するというものでもあった。その意図も、学生にはごく簡単にではあるが伝えた。

この意図を学生たちはどのように受け止めただろうか。作業終了後簡単なアンケートを実施した。（26人回答）

まず授業内容については、とても面白かったという回答が多かった。

・とても面白かった―22 人　・わりと面白かった―3 人
・どちらでもない―1 人　・あまり面白くなかった―0 人
・まったく面白くなかった―0 人

併せてこの課題に意味があったと思うかについての質問もしてみたが、これもとても意味があったとの回答が多かった。

・とても意味があった―15 人　・わりと意味があった―8 人
・どちらでもない―2 人　・あまり意味がなかった―0 人
・まったく意味がなかった―0 人

またこの課題の意図は、子どもがさまざまなものと出会うときの追体験でもあるが、そのことについて何か感じたことはあったかという問いにも、様々な感想が述べられた。

最も多くの感想が、発想の自由さや固定観念の打破につながったというようなものであった。

・ものを見た目で判断して役割を決めつけないということや、自分の常識や固定観念にとらわれないことの表現の自由さについてのメッセージを感じた。
・ものの役割を改めて知られる機会にもなると思うし、逆に役割を知らずにするのはおもしろいと思った。
・イスは座るものという固定観念がなくなって楽しくできました。
・新鮮な感覚が芽生えた
・先生の言葉でイスがイスに見えなくなった感じがして、凄くワクワクしました。
・今回やってみてオブジェの意味がよくわかりました。
・発想、気づくことにつながる課題だと思います。
・座れなくなり、オブジェになる感じは、なかなかできない体験なので良いと思いました。
・ものの見方が変わったりする。
・イスは座るものと認識していましたが、手すりに掛けたり天井に掛けることによって違う見方があることに気付いた。
・何かを作ろうとしてや目的を考えて作ったものではないところに何かできた！という不思議さが面白い。
・普段何気なく使うものでも、視点を少し変えることで芸術の幅が広くなると感じた。
・実際に椅子を並べて、オブジェを身近に感じることができてよかった。概念を変えることができた。
・ものを見た目で判断して役割を決めつけないということや、自分の中の常識や固定観念にとらわれないことの表現の自由さについてのメッセージを感じた。
・考え方をひとつに絞らず、物の見方の広さを感じた。

また、課題と子どもの発想の関連性についても、様々な気づきやコメントが見受けられた。

・子どもだったらもっと面白い発想をするだろうなと思った。
・子どもの頃いろいろなものを初めて見た時、自分が知っているのと違うものに見えたことを思い出しました。
・大人になって、物の見方や考え方を固定してしまうことが多いが、置いている場所を変える（見方を変えてみる）と考えさせられることや、元からあったものを新たに発見する楽しさなどを感じることができました。
・子どもの時に、なんでもおもちゃにして見立てたりして遊んでいたことを思い出しました。
・こういった活動によって、子どもの気持ちを知ったり、子ども目線になることができてすっごく楽しいです。
・大人の固定観念が無い子供が物を見た時に、様々な遊びや発想につながるのはとても良いと思いました。
・大人は物に対しての固定概念が強く、使用目的にとらわれている。子どもの柔軟な考え方に目を向けてみるのもいいと思う。
・年を重ねるごとにものの使い方を意識してそれでしか使っていなかったけど、なにかに見えたり、いろんな発想ができておもしろかったです。子どもの発想っておもしろいなと改めて思いました。

実に様々なコメントが寄せられたが、多くが発想

の自由さや柔軟さに気付くことが出来たというものであり、その点では一般的な、先にテーマの決められた造形課題とはちがう意味性が理解されたようだ。

今回は最初のオブジェの説明が 15 分程度と短い時間の中でのものであったが、それにもかかわらず学生たちはオブジェの意味をしっかりと理解し、興味を持って行動に移していたことが、アンケートでも十分に窺えたと言えるだろう。そしてオブジェの概念と、子どもの事物への認識との関係についても、十分とは言えないにせよ理解を寄せ、中には自己の子どもの頃の事にまで思いを馳せている様子も窺えた。もちろんこれらのコメントだけで課題意図が理解され達成されているとは判断出来ないだろうが、概念の広がりと、幼児の事物に対する認識のあり方について思考するきっかけが持たれたことは言えるだろう。

4　オブジェと幼児の認識の関係について

これまでオブジェの意味について考察し、筆者が実践した５か所でのオブジェの課題内容について振り返ってきた。今後も機会を見つけてオブジェの課題を行っていきたいと思うのだが、その目的は何なのだろう。単に目新しい、変わった課題を行うということでしかないのか。そうではなく、オブジェには幼児の造形指導を考える時に、これまでとは違う視点を持つことが出来るのではないかと考える。

幼稚園や保育園の現場では、日々が行事や決められた制作活動に多くを占められている。目的の明確な制作活動を子供たちに与えることは、一斉教育の場では明確な目標と均一な結果を得やすいことから、一定の教育成果が得られやすいのは当然であろう。

何を作るのかのテーマが先に決定され、適切な造形素材として様々な材料が用意される。立体製作として廃材が使われていたとしても、それはすでに造形素材としての目的が与えられている。

しかし子どもの本来持っている日常の事物への接点は、何か目的を持って出会い、使用する前に、まずは意味を超えた出会いがあるはずである。そのものの本来の目的に関わらず、質の違う素材として触れていく。

保育所保育指針解説書においても、「子どもは、様々な環境との相互作用により発達していく。すなわち、子どもの発達は、子どもがそれまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身につけ、新たな能力を獲得していく過程である。」2）とあるように、子どもはまず自己の周りの様々な環境に直接触れ、感じ取り、働きかけていくことで、自己と環境の関係を認識していく。この環境とは自然や人工物、人など様々であるが、これを様々な事物とした場合、オブジェの持ちうる意味が見えてくる。

乳幼児期におけるものとの出会いは、意味性を未だ持ち得ていない単なるものとしての遭遇である。重さや固さを手や口腔で確かめようとする。その段階を探索活動と呼ばれるが、その時、手にしているものの使用目的は、乳幼児本人にとっては全く意味を持たない。様々なものや事象を直接体験しながら、感覚が複雑に成長し、受動的な状態からやがて自ら周りの環境に関わりだす。そしてその時々の感情の変化を表そうとする。

子どもの豊かな育ちのためには、使用目的の限られた遊具だけではなく、自然物や人工物の素材においても、危険でさえなければ、そのもの本来の使用目的に関係なく、重さや固さ、形状や質感など、多様なものに触れる機会を持つことが重要であろう。

そしてその人工物においても、制作時に意図された使用目的に何ら関わることなく、子どもはそのものと出会う。使用目的よりも、それぞれの形状や材質、重さなどを感覚によりとらえる。まさにそれは、使用目的が剥奪されたオブジェとの出会いと同等の関係ではないだろうか。

しかしその出会いのダイナミズムを、大人の方が阻害している場合も多いと思えてならない。作られたものの多様な可能性に子ども自身は気づいていても、意外と大人としての保育者側が気づいてはいないように思える時がある。椅子なら椅子というもの自体の概念に囚われてしまうことで、子どもがそのものをどのように認識しているかに気付かない可能性がありうる。ならばその色眼鏡を取り除いて、子どもが初めて触れる視点に立つために、オブジェ概念は有効であると考えるのである。

「子どもが思わず触りたくなるような、動かしてみたくなるような、関わりたくなるような魅力ある環境を構成することが重要です。」3)

この「魅力ある環境」とは、自然環境や保育用に用意されたものだけでなく、ごく日常の事物であっても、子どもにとってはそのもの本来の使用目的とは関係のない刺激を受け止めるだろう。例えば椅子が座るものという大人が理解している常識の範疇ではなく、子どもが初めて触れる「もの」として、まず形状や質感を感じ取るだろう。そして椅子を椅子の目的とは関係なく、あるべき所とは違うところへ移動したり、別のものへと見立てたりするかもしれない。使用目的とは違う関わり方をすることで、子どもの豊かな表現は生み出され得る。

その時に、保育者が単純に大人の常識に従い制止

しようとするのか、子どもの側に立ち理解し受け止めようとするのかで、子どもの表現の自由度は違ってくるだろう。しかし表現の豊かさの源泉でもある、ものとの自由な遭遇を、保育者が大人の常識によって理解しきれていなかったり、制約を与えてしまったりしていることはないだろうか。椅子は椅子であり、座るものとしてのみ使用しなければならない。椅子を積み上げたら危険である。これらの日常での諸注意は当然の視点であるが、自由な造形活動を重視するならば、日常の約束事を一旦白紙にし、意味性を持たない単なるもの＝オブジェとして、様々な事物を認識し直すことも重要であろう。子どもの発想を理解し共通認識とするためにも、オブジェという概念を理解することが、製品が持つ約束事を知りえない子どもの視点に立ち戻り、子どもにとっての事物との出会いの可能性を追体験するものとしても成立するはずである。

5　終わりに

本稿では意味性を奪われた存在であるオブジェについて考察する中で、意味性の未だ成立されていない子どもたちが事物に出会うこととの繋がりについて考えてきた。

人はこれまで経験のない事物に出会うとき、「～みたい」という、自己がそれまでの経験で既に認知している事物からの類推によって認識する。無意味なままに、意味を宙づりにしたままにすることには不安感を抱く。だからこそ、美術館に展示された便器を目の前にして人は理解しえない不安を抱く。

便器は便器として、椅子は椅子としてそれぞれの役割を認識し共有し得るとき、共通の社会性を持って安定し、懐疑性を持たずに事物と対峙できる。その共通認識を持ちえる前の子どもが大人の常識と反する事物への反応を見せるとき、いわゆる常識外れや社会性の未発達として大人は戸惑い、常識を教えようとする。事物にまつわる社会的規範や常識を、経験の中で疑いなく取り込んでいくことで、人は大人になっていく。

しかしそれと同時に、常識の範疇にイメージは固定化され、自由で豊かな想像力が狭められ失われていくこととなる。子どもの持つ自由なイメージの広がりを理解しえないばかりか、制限し否定しようとしていく。この固定化されたイメージ認知を再度解き放つ可能性を、オブジェは持っているのではないだろうか。

オブジェの概念は現代美術の根幹であり、単なる学習理解だけならば幼児教育とは無縁のものと見なされるだろう。しかし今回の新たな解釈により、一見無関係のオブジェと幼児教育との意外な関係性が開かれたのではないだろうか。ただこの考えはまだ端緒に過ぎず、私自身の幼児の認識そのものへの理解はまだまだ不十分であることから、これらの基礎理解を深めるとともに、より広い対象のもとオブジェ課題を行うことで、もっとオブジェの可能性が見出し得るはずである。この認識のもと、今後もオブジェをテーマにした授業展開を多方面で試みていきたい。

引用文献

1）デュシャンの世界　M・デュシャン＋P・カバンヌ　岩佐鉄男＋小林康夫　朝日出版社　p 94 ～ 96 (1978)

2）保育所保育指針解説書　厚生労働省編　p 32 (2008)

3）保育所保育指針解説書　厚生労働省編　p 26 (2008)

受理　2018 年 2 月 15 日

公開　2018 年 3 月 23 日

＜連絡先＞

原田　昌幸

〒536－8585　大阪市城東区古市 2-7-30

大阪信愛女学院短期大学

mharada@osaka-shinai.ac.jp